

---

# **悪魔でもバスガイド**

キオナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔でもバスガイド

### 【NZコード】

N9752Y

### 【作者名】

キオナ

### 【あらすじ】

引き籠りがちで人と接するのが苦手な少年、じゅうまくろの降魔黒乃。

そんな彼の唯一の心の支えは人気カードゲームの萌えキャラクターであり脳内彼女であるフィンディとのラブラブ生活を妄想する事だった。

いつも通り自宅で一人彼が部屋で妄想をしていると玄関のチャイムが鳴る。

人と接したくない彼は当然無視するが、次第にチャイムの鳴るペースが早くなりドアノブが何回も回される。

それでも彼が無視していると、無理矢理玄関のドアが破壊され誰かが入つて来た。

黒乃是怯えて布団の中に隠れフィンディに助けてを求める。

遂に黒乃の部屋の扉が開き、誰かが黒乃の布団を剥ぎ取った。

黒乃が恐る恐る侵入者の正体を確認すると、そこにいたのは実在しない筈のフィンディが笑顔で立っていた。

フィンディが語るには黒乃を地獄のバストゥームに参加させる為に迎えに来たと言う。

「フィンディはやつぱりツインテールの方が似合ってるよ?あ、でも君ならどんな髪型でも可愛いよ?本当だつて。」

少女のイラストが描かれた厚紙と楽しそうに会話しているこの少年の名前は降魔黒乃。

彼はもう半年以上学校には行つておらず、人気カードゲームのキャラクターと愛し愛される妄想をしながら毎日を送つている。

彼は元々現実世界の女子も好きになれる普通の男の子だったのだが、好きだった女子が転校してしまい、それならばと何処へも行つたりしない2次元の女の子を愛する事に決めた。

彼が不登校になってしまったのは特に苛めや嫌がらせがつたからでは無く、単純に脳内嫁との生活に嵌まつて抜け出せなくなつてしまつたからである。

因みに彼がフィンディと呼ぶのは茶髪でツインテールの女の子がバースガイドのコスプレをしているカードで、本来このカードの名前は

“悪魔でもバスガイド”だ。

フィンディとは英語で悪魔のよつな人を意味する“Friend”を元にして彼が名付けた名前で、この名前を考えるのに約1日も掛けた。

それから30分程経過した時だつただろうか、彼がフィンディに一方的な会話をしていると、自宅のチャイムが突然鳴り響いた。

「誰だろ?こんな時間に?ねえフィンディもそう思うよね?」

黒乃是普段から人と接するのは苦手なので家の電話やチャイムが鳴つても絶対に出る事は無い。

いつもは彼の母親が対応しているのだが今日は映画館へ外出中で不在だつた。

母親が不在な事を知つても勿論彼は無視に徹する。

彼は普通の高校生なら学校へ行つている時間帯なのにも関わらず自分が家にいるのは可笑しいと思われるのではないかと不安を抱いており、同時に人前で上手く会話出来ないのでないかという不安も抱いている。

訪問者は誰も出ない事に対して腹を立ててているのかチャイムを押す間隔が速くなりドアノブを激しく動かして耳障りな音を立て始めた。しかしそれでも無視をしてフインディとの妄想に浸つていると訪問者は諦めたのか急に降魔家は静まり帰るが、その後玄関のドアが吹き飛ばされ誰かが笑い声を挙げながら家に侵入した。

侵入者の笑い声は女性であり、その不気味な笑い声と共に足音が黒乃の部屋へと近付いて来る。

黒乃是今まで味わった事の無い恐怖感に支配され、布団に包まってフインディに助けを求めた。

遂に侵入者は黒乃の部屋へ辿り着き、扉を開けて小刻みに揺れる布団を見つけると突然毛布を掴み投げ捨てた。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

毛布を剥ぎ取られても尚、黒乃是目を開じていたが数十分経つても侵入者からのコンタクトは無く聞こえて来たのは溜め息の様な音だけだった。

彼は何もされない事を逆に不気味に感じたが、このまま寝た振りをしていても解決がしないのは分かっていたので勇気を振り絞りゆつくりと重い目蓋を開いた。

暫らく目を開じていた所為で震んだ視界に映っているのは彼が大切にしているフインディのカードを怪訝な表情で持っている少女だった。

自分の目に映る少女の姿を見て驚愕した彼は何度も確かめる様に目を擦つて確認した後、無意識に一言呟く。

「本物の… フインディ…！？」

その言葉を聞いた少女は満足気に頷いて頬を赤らめた。

彼の言つた通り、まるで最新の3D技術で投影されたのではないかと疑いたくなってしまう。一次元の架空のキャラクターフインディが椅子に座つていた。

彼女は骸骨の意匠が施された青いバスガイドの制服を着たやや赤みがかった茶髪のツインテールに大きな真紅の瞳<sup>リア</sup>と明らかに現実世界の人間ではない風貌だった。

この時黒乃の中には恐怖心は既に消し飛んでおり、確かにそこに存在しているフインディを色々な角度から疑望した後、投げ捨てられていた毛布を拾つて布団の元へ行き再び包まって眠つた。

フインディは再び布団に包まつた黒乃を見るなり椅子からすくつと立ち上がり、今度は彼ごと毛布を掴んで投げ飛ばした。

投げ飛ばされた黒乃是部屋の窓ガラスを割つて突き抜け、ベランダ

に転がつた。

ベランダに飛ばされていた彼は暫らくの沈黙の後、毛布を被りながら地を這う様に自分の布団のある場所に戻ろうとしたが途中で力尽き氣絶してしまった。

気絶してから約3時間後、黒乃是目を覚ました。ふと窓の外を眺めると外は真っ暗になつており、窓ガラスも修復されていた。

やはり夢だったのかと彼は嬉しいのか悲しいのか判別し難い気持ちを抱きつつ左手を支えにして起きあがろうとした時、何か手に変な感触の物が当たつている事に気付いた。

まさかと思い彼が恐る恐る左を見るとフィンディが恥ずかしそうな表情をしながら隣で横になつていた。

「キヤハ？ 黒乃さんつて意外と大胆ですね？」

「ほ、本物だ… 本物のフィンディ… それともこれは夢の中の夢…？」

未だに黒乃是フィンディが実体化している事を信じられず、彼女の頬を摘まんで伸ばしたり髪の毛の匂いを嗅いだりしたが最終的にはどう考へても夢や幻では無いという結論を出した。

彼は突然の来訪者に対してもう対応して良いか分からなかつたので取り敢えず彼女を座布団の上に座らせてお茶と菓子を目の前に出した。

しかしひайнデイはそれに手を付けず、首を傾げて黒乃をじっと見つめている。

彼は気まずくなり一旦部屋を出て深呼吸をしてから戻るがやはりフィンデイは動かず固まつたままだつた。

無論、彼女と話をしてみたいという気持ちは黒乃にはあるのだが普段カードにしか語りかけていない重度の「ハイニケーション障害」の少年にとつては高いハードルだつた。

それでも彼は夢にまで見たフィンデイがこの現実世界に現れるシチュエーションに胸を躍らせており、今直ぐにでも彼女を抱き締めたい気分だつた。

「ねえ黒乃さん何で黙つてるんですかあ？いつもは可愛いよーとか大好きだよーとかフィンデイちゃんマジ小悪魔ーとか言つてくれるのにい…」

何も言つてくれない黒乃を見かねたのか、彼女は口頭自分のカードに言われている台詞の内容をわざと強調して呴きながら彼に詰め寄つた。

黒乃はまさか普段何気なくカードに対し言つている言葉がその本人に言われるのがこんなに恥ずかしいとは知らず、顔を真っ赤にして涙目になつた。

「な、なんで…なんで知つてるんだよ…」

「キヤハ？ そんなのいつも一緒にいるからに決まつてるじゃないですかあ？ もう恥ずかしい事言わせないでくださいよ～黒乃さん～？」

動搖している黒乃に更に追い打ちをかける様に彼女はその後も彼に言われた台詞を何回も言い続けた。

だが黒乃是遂にフィンディの言葉責めに耐えられなくなつて部屋を飛び出し、玄関の扉を開けてそのまま走り去ろうとしたが、家の前に停まつていた巨大な物体にぶつかり鼻血を噴き出して倒れた。通れる筈の道が通れないとは一体何事かと、彼は起き上がりつて前方を確認するとそこには真黒に染まつた怪しいバスが停車していた。あまりにも可笑しい状況に黒乃が呆気に取られて口を大きく開けたまま凝視していると、背後からフィンディがバスの前まで歩いて来てフラッグを小さく左右に振つた。

「地獄のバスツアーヘよつこそ黒乃さん？」

「地獄の…バスツア…！？ひええ！僕を殺す氣だなこの悪魔！人でなし！」

「キヤハ？その通りあたしは人じやなくて悪魔ですよー？あ、でも大丈夫？大事な未来の旦那様を殺したりなんてしませんから」

黒乃は何故こんな事になつてしまつたのか原因を探る為今まで自分とフィンディが繰り広げた妄想会話を再生すると、3日前に彼女がガイドを務めるバスツアーヘ行つてみたいと言つていたのを思い出した。

甲斐性が無い彼がそんな突拍子も無い事を言つていたのは、妄想の中でなら何を言つても構わないと思えたからであり、まさか本当に行く羽目になるのなら彼は絶対に言わなかつただろう。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

だがそんな約束よりも今フインディがとんでもない事を言った事に彼は自分の耳を疑つた。

確かに彼女は彼に対して“未来の旦那様”と言つたからだ。黒乃是いつも妄想で彼女に僕のお嫁さんになって等のアプローチをした事はあつたが、彼女の口から自分を認める言葉が聞ける日が来るとは夢にも思わなかつただろう。

この会話だけなら彼は幸せ者なのだが、そもそも何故架空の存在であるフインディが実体化して彼を迎えて来たのかが不明なままであつた。

「ねえ、どうして君が現実にいるの？正直訳が分からぬよ。」

「良い質問ですねえ黒乃さん？あなたが持つてあるカード、実はあたし つとと危にやい危にやいうつかり口を滑らせる所でした？つてな訳で内緒です、内緒？」

結局黒乃の最大の疑問は有耶無耶にされ闇に葬られた。

ただ一つ確信したのはそれを言おうとした時のフインディの顔は強張つており、聞いてはならない真実であるのは間違ひ無い。彼は前にかなり怪しいが死ぬ程愛しているフインディ、後ろには安全だが平凡な家のどちらかを選ばなくてはいけない究極の選択に迷つていたが、善く善く考えてみれば家を選んだとしても先程の様に強行手段で家を破壊され連れて行かれるのは間違いなさそうなので彼女に言われるまま大人しくバスに乗り込む選択をした。黒乃が乗り込んだバスの中には誰も乗車しておらず、運転手もいなかつた。

立っていても仕様が無いので彼は一番前にある右の窓側の席に座り、

頬杖を突いて外の景色を眺めているとエンジンの音も掛かっていいのに勝手にバスが動き始めた。

座っている彼の隣の席にフィンディが飲み物の入った紙コップを二つ持つて座り、片方を彼に渡した。

それを受け取つた彼が中身を覗くと異様に青い絵具の様な液体が入つていた。

「ちょっと…何なのこれ?どう見ても飲み物じゃ無いよねこのエイリアンの血液みたいな。」

「キヤハ?これは地獄名物の天使の生き血で～す?あ、隠し味にいんや ウフフ?」

天使の血は青いという事実にとても残念な気持ちになつた黒乃是無言で紙コップをフィンディに返した。

しかし実際は最初は透明だつた炭酸飲料水に彼女が大量の惚れ薬を投入していただけで本当は天使の生き血や地球外生命体の血液でも何でも無くただの彼女の欲望の塊だつた。

その後彼は自分の飲み物の色が彼女の物と違つ事に気付き、冷めた態度でそれを指摘すると彼女は慌てて彼に普通の飲料水を渡した。

「そろそろ来ますので黒乃さん?ちゃんとシートベルト付けてくださいね?」

「来るつて何が?誰か来るの?」

フィンディが黒乃にシートベルトの着用を促すと、急にバスは道路より遙か上空に昇つて辺り一面光に覆われたかと思うとバスの前に大きな真黒な門が出現し、バスはその中へ吸い込まれるかの様に入つて行つた。

この真黒な門こそが黒乃の住んでいる人間界を地獄へと繋ぐ入口である。

黒乃是この時やつとシートベルトを着用する意味を理解したが、既に座席から落ちていたので意味は無いに等しい。

そんな彼を余所にフィンディは呑気に饅頭を食べながら謎の言語で書かれた雑誌を読んでいる。

「おい！それでも君はバスガイドかー！」

「キヤハ？心配しなくとも黒乃さんの分のお饅頭も『用意してありますから？はい、あーん？』

「あーん…じゃないよ！僕が言いたいのは客の心配ぐらじして欲しいって話！」

彼女は黒乃をからかつて面白そうに笑っていた。

黒乃是そんな彼女の態度が気に入らなかつたのか自分の座席に戻り、隣に座つている彼女の方を見ない様に体を右に傾けて窓の外を眺めるとそこには美しい花々達が咲き誇つており、一般的な地獄のイメージとは掛け離れた光景だつた。

興味津津になつている黒乃の肩にフィンディはもたれかかりながらこの場所の説明を始める。

「右手に見えますのは、ネクロ高原？ここにしか咲かないブラッティリースって花はあたし達悪魔には重要な役割があるんですよ？左手に見えますのは、ミスト村？人口400人の小規模な集落ですけどシクレタイトと呼ばれる鉱石の加工技術を扱えるのはここに住んでる悪魔だけなんですか？」

フィンディが説明を終えるとそれまで空中を浮遊していたバスは急降下し、近くのミスト村付近へ着陸した。

勿論何も教えて貰えなかつた黒乃是またも吹き飛ばされそうになつたが、今度は彼女に息が出来ない程に抱き締められたので吹き飛ばされずに済んだ。

黒乃是行き過ぎた愛情表現をする彼女を無理矢理引き離そうとするが、知恵の輪の様に体を絡ませられて解けないので仕方無く彼女を不格好に抱えたままバスから降りると一人の若い女が跪いている。彼女の名前はユリオ、村長であるソキウス・ミストの娘でフィンディが村に訪れると聞き案内役を買って出た。

「姫様、ようこそ我が村へおいでくださいました。」

「もう二つも言つてるじゃない堅苦しいのは止してよ～？」

「姫様…？フィンディって姫様だったの！？」

そうフィンディは地獄の姫君、本名はフィンディ・ヘル・アンダーワールド。

この地獄を統べる魔王ルキフェルの娘であり、実は黒乃を地獄に連れて来たのは観光目的では無く彼を夫にするのが真の目的だ。

ユリオに連れられ、黒乃とフインディは小さな家屋や建物が並ぶ村中で一際目立つ大きな家の中へと招き入れられた。

黒乃が村中を見て思う限り、少し古い年代の雰囲気はあるが人間界とは余り変わらない。

彼女は薄暗い屋内に無数に配置されている燭台に火を灯し、ほんわりと明るくなつた廊下を通つて広い部屋に2人を案内する。そこには立派な髭を生やした厳格そうな老人が椅子に腰掛けており、彼等の姿を確認するなり立ち上がり丁寧にお辞儀をした。

そう、この老人こそがこのミスト村の村長ソキウス・ミストである。彼は先祖代々ミスト村を治める家系の末裔で現在32代目の村長だが自分の身体の衰えに限界を感じており、一ヶ月後には娘のユリオに村長の地位を託す事を決めている。

「姫様、また一段と美しくなられましたな……どうぞそこへ腰かけてください。ユリオ、お二人に飲み物を用意してくれ。」

「あ、お構い無く。えつとすみませんあなたは……？」

「申し遅れました私、この村の村長を務めておりますソキウス・ミストと申します。そこには娘のユリオです。以後お見知りおきください。」

「成程……村長さんでしたか。僕は降魔黒乃　いや、地獄風に言つならクロノ・ゴウマ……ですかね？」

因みに黒乃の名前の由来は両親がかつて飼っていた黒猫の様に賢くなつて欲しいという願いが込められて名付けられた。

しかし当の本人は不吉の象徴の迷信がある黒猫に削った名前を毛嫌いしており、この名前の所為で今まで不幸な人生を送つて来たと思ひ込み両親を恨んでいる。

「ねえねえソキウス♪ あれ用意出来る?」

「勿論です。ユリオ、あれを持ってきてくれ。」

「ん? あれって何? フィンディ?」

「キヤハ? 教えちゃつたら黒乃さんのとくつても可愛い驚いた顔が見れなくなっちゃうじゃないですか?」

ユリオは扉を開けて部屋から出て行き、暫らくすると黒い布に包まれた細長い物体を両手に抱えながら部屋に戻つて来た。  
彼女はフィンディにそれを渡すと、酷く疲れた様子で椅子に腰を掛けゆつくりと紅茶を啜つた。

この重量感のある黒い布に包まれた細長い物体の正体はミスト村秘伝のシクレタイト加工技術により生成された魔剣“獄炎”で、斬り裂いた者を決して燃え尽きない地獄の業火で焼き尽くすと言われている。

だが“獄炎”は人を斬る為では無くある儀式に使われ、その真価は黒乃とフィンディにとつてのみ發揮されるだろ?。

「それは…! ?」

「フフ? 何で剣なのつて顔をしてますねえ黒乃さん? なんと、これを魔王城にいらっしゃるお父様にお渡しすればあたし達は夫婦になる事が認めて貰えるんですよ?」

「ぶつ！夫婦！？そ、そりゃあ嬉しいけど…僕高校生だし働いてないし根暗だし引き籠りだし頭悪いし格好良くないし運動神経皆無だしえーっとそれからそれからとにかく僕なんかじゃ無理だよう

…」

> .i35310 — 4371 <

夫婦 それは愛し合う男女がお互いを支えて行く美しい事。  
 フィンディが言い放つた言葉は所詮妄想の中でしか人を愛した事が無い黒乃には荷が重過ぎる言葉だ。

「彼ら妄想の中で男らしく“好きだ”、“結婚して”と言えても現実世界の彼は自分に自信が無いマイナス思考の人間でしか無い。しかしフィンディは彼の消極的な態度に呆れる所か惚れ惚れしており、ある意味2人の相性は抜群に良いのかも知れないが。

「ええ～だつてフィンディは僕の嫁つて言つてたじやないですか？それにあたし黒乃さんになんな恥ずかしい事されたのにい…うう、もうあたしあ嫁に行けないです…つ！」

「ちょっと…誤解される様な言い方はしないでよ！？」

「もう姫様に手を出しているとは…流石ですね黒乃様、やる事が早い。ですが紳士ではありませんね。」

「ユリオさん違います！僕は紳士です信じてください！」

「キャハ？ そ、うよユリオ、黒乃さんは変態といふ名の紳士なんだから？」

フィンディの策略でもう後には引けなくなつた黒乃是素直に彼女と夫婦になりたいと認めた。  
 つまりこれから黒乃とフィンディは力を合わせて協力し地獄の最北端にある魔王城を目指す。

何れにせよ夜遅いこの日はミスト家に泊まり、2人は夕食をご馳走

して貰う事になつた。

黒乃がテーブルに着くと置かれているのはナイフとフォークとグラスにナプキン　地獄の食事はどうやら洋食の類らしいのだが普段箸しか使わない彼がテーブルマナーを知る筈が無い。

無情にもシェフが次々と運んで来る料理を美味しそうに頂くフィンディ達を気拙そうに眺め、見様見真似でナイフとフォークを握つてみるがやはり上手く出来ずに皿と食器を接触させて耳障りな音を發してしまつた。

当然それを聞いた皆は彼を注目し、不思議な顔をする。

「あ……えと、実は僕このうの初めてで……」めんなさい。

「うわちこじめんなさいです……あたしが勝手に知ってると思い込んでて……」

「フィンディ、もし良かつたら教えてくれないかな?夫になる僕がこんななんじや君に恥を搔かせちゃうからさ。」

「！　はい旦那様つ？」

黒乃の口から夫になるという言葉を聞いたフィンディは天使の様な頬笑みを浮かべた。

彼女は飲み込みが悪い黒乃に腹を立てる事も無く数時間も掛けて手取り足取り優しくテーブルマナーを教えたが、勿論彼は全てをマスターしてはいないのでこれから地道に覚えさせるつもりだ。

長時間の特訓を終えた2人は風呂へ入り、後に就寝する為に2階の来客用の部屋へ上がつた。

部屋の中には相部屋なのに大きなベッドが一つしか無く、必然的に黒乃とフィンディは一緒に眠らざるを得ない。

この時、時刻は午前2時を周り既にソキウスとユリオは床に就いて

18°  
10 3 5 3 1 3 1 0  
—  
4 3 7 1 <

「黒乃さん？あたしが寝てる間に悪戯したらお仕置きですかうね？」

「す、す、する訳無いだろ！おやすみっ！」

自分の悪巧みを簡単に見透かされた黒乃は拗ねてフィンディから背を向け目を閉じると、彼女も鼻で笑い背中合わせになる様に彼に背を向けて眠り始める。

当初黒乃是フィンディの事を考えずにいられたが、30分経つた頃には興奮して性的欲求が抑えられなり完全に目を覚ましてしまう。そんな事とは露知らず、小さな吐息を立てて穏やかに眠るフィンディを黒乃是強く抱き締めると仄かに甘い匂いがした。

ここで止めておけば良かったのだが彼の既に理性は崩壊し、本能を取り戻した一匹の雄と化している為ブレーキは掛からない。だが勢いに任せ黒乃が目を閉じてフィンディに口付けをしようとした時、計り知れない恐怖が幕を開ける。

不可解な唇の感触に悪寒がした彼が目を開くと、フィンディが悪戯な笑みを浮かべながら人差し指で彼の唇を抑えていた。

「あ…お、おはようフィンディ…」

「キヤハ？いけませんよお黒乃さん？」一ゆーのは 結婚してからこじましょうねえ…つ…」

「ひいいっ！」

忠告した通りフィンディは黒乃にお仕置きをする。

黒乃是縄で手足を縛られて一晩中廊下に放置された後、起こしに来

たコリオに縄を解いて貰つ。

「黒乃様にはそういう趣味があつたのですか。仮にも他人の家の  
ですから自重してくださいね？」

「いや僕SMプレイに興味無いですから…まあ解いてくれて感謝し  
ます。」

「では姫様を起こして降りて来てください。朝食の準備が整つてお  
りますので。」

黒乃是ベッドですやすやと眠るフインディを優しく擦つて起こし、  
1階に降りた。

テーブルに置かれているのは紅茶、焼き立てのトースト、卵料理、  
オートミール等々 どうやら地獄の食文化は人間界の西洋に酷似  
している様だ。

因みに昨日はフインディをもて成す為に村一番の料理人に夕食を作  
らせたが、今回はコリオの手料理である。

何れにせよ他国の食文化を知らない黒乃からすればとても興味深い  
物であるのは間違ひ無いだらう。

「うわあ、うまい。コリオさんの料理とっても美味しかったです。」

「お気に召した様で何よりです。またいつでも」「馳走しますよ？」

「じゃあお言葉に甘えてもう一つお世話をしなりつかなあ。  
えへへ…」

「へえ… 黒乃さんはお仕置きが足りないみたいですねえ？」

「もう勘弁してよ?冗談だつて。」

朝食を終えた黒乃是身の丈程ある“獄炎”を背負い、ファインディと共にミスト家を後にして。

この日はまるで2人の旅路を祝福するかの様に雲一つ無い晴天で、時々吹くそよ風が重荷を背負い疲れた黒乃を励ましてくれている。そして2人は村を抜け停車してあるバスの前まで辿り着くと、弓矢を持ち緑色のTシャツを着た男が待ち構えていた。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

男の名前はレラジエ・グリーン、魔王直属部隊“地獄72柱”的騎士である。

“地獄72柱”とは魔王が地獄中から集めた精銳の悪魔達で数字が少なければ少ない程強い力を持つ。

その中で14番目の中の実力者であるレラジエが黒乃達の前に現れたのは、魔王の命により黒乃がフィンディに相応しいかどうかを見極める為だ。

これから黒乃達が魔王城に向かう旅路は、彼を含む72人の悪魔達が行く手を阻む刺客となつて襲い来る事になるだろう。

「オッス、君が噂に聞く人間ツスか？」

「え？ ああ そうですけど？ あなたは？」

「オッス！俺は泣く子も黙る“地獄72柱”が一人、レラジエツス！」

「えーと…レラジエツスさん？ その凄そうな名前の“地獄72柱”的方がどんな用ですか？」

「なつ！俺の名前はレラジエツスじゃないツスー・レラジエツス！」

「何だかややこしいなあ…で、ラレジエツス レラジエさんが何の用ですか？」

レラジエの紛らわしい喋り方を少し面倒と思いながらも黒乃はなるべく丁寧に質問すると、自分の名前を正しく覚えて貰えた事に満足

したのか、彼は腕を組んで何かに納得して頷く。

突然レラジエは真剣な顔をして背中の矢筒から矢を1本取り、弓に装填して黒乃に放つた。

黒乃是間一髪の所でフインディに押し倒されて避けたが、何故レラジエに狙われたのか分からず困惑する。

怯えて縮こまる黒乃を庇う様にフインディは彼の前に立ち、レラジエを睨んだ。

「いきなり不意打ちとは随分と手荒ねえレラジエ？」

「攻撃？まさか。俺はそんな卑怯な真似はしないッスよ。つてか姫様ともあろう方が後ろの殺気に気付かなかつたツスか？」

「後ろ……？」

フインディが後ろに振り返ると、矢で射抜かれた巨大な蜘蛛が急速に腐敗し息絶えていた。

この巨大な蜘蛛の名前はアラクネー、地獄に生息する肉食蜘蛛で特に悪魔や人間が好物である。

もしレラジエが矢を放たなければ黒乃もフインディも今頃美味しく食べられてしまつていただろう。

つまりレラジエは元々黒乃の命を助けるべく矢を放ちアラクネーを退治したのだが、少々やり方が粗暴過ぎた為に誤解されてしまった。それはさて置き先程まで生きていたアラクネーが急速に腐敗したのはレラジエの能力で、彼が放つ矢には壊疽効果が付与され射抜かれた者は必ず壊死してしまつ。

悪魔には彼の様に人間で言う魔法や魔術が扱える者があり、その能力を総称して“煉”と呼ぶ。

身体的特徴は人間と何ら変わりの無い地獄の住人達が悪魔と呼称されるのはその所為であり、厳密に定義するなら彼等も人間である。

>.i35310  
—  
4371<

「まさか地獄にこんな化け物がいるなんて…本当にレラジHさんのお陰です、助けてくれてありがとうございました。」

「ふん、勘違いしないで欲しいツス！姫様に相応しい男かチエックする前に死んで貰つてはこっちが困るんスよ？ま、その必要も無さそツツスけど。」

「へーディう意味よレラジH、まさか黒乃さんがあたしに相応しく無いって言いたいの？」

「その通りツスよ、あんな蜘蛛如きから姫様をお守り出来ないとは幾ら何でも軟弱過ぎるツス。」

レラジHの言う通り、黒乃是軟弱な男だ。

唯でさえ過大評価してやつと普通並の身体能力であるにも係わらず、今まで半年も外に出ず引き籠つっていたのだから精々日常生活を送るのがやつとだらう。

無論、今彼は背中に“獄炎”を背負つているだけでもかなりの体力を消耗しているのでまともに動き周る事さえままならない。

黒乃是レラジHの言葉に悔しさを抱くも自分が軟弱なのは事実、反論出来ず俯いた。

「なら一ヶ月！　じゃなくて一週間で良いから猶予を頂戴！？それまでに黒乃さんをあなたより強くしてみせるからー。」

「残念ながら待てないツス。大人しく“獄炎”を俺に渡してくださいツス。勿論拒否するんならその男を殺すツスよ？」

「じゃあ あたしがあなたを殺しても良いって事ねえ…」

そう呟いたフインディの顔は不敵な笑みを浮かべ、徐にポシェットから白紙のカードを取り出す。

彼女はそれをラジエの前に掲げると忽ち彼がカードの中へと吸い込まれて行き、先程まで何も描かれていたなかったカードにララジエの絵が出現した。

これがフインディの“煉”<sup>サブレッショ</sup>、彼女の半径3mの範囲内に存在する肉体・靈体を意のままにカードの中へ封じ込める事が出来る。

尚、封じ込められた者は徐々にカードに魂を喰らわれ3時間経てば消滅してしまう。

目の前で起こった有り得ない光景に黒乃が呆然としていると、フインディはそつと彼に手を差し出して立ち上がらせた。

「ねえフインディ、悪魔つて凄いね…」

「フフン」これは“煉”つていつ悪魔固有のスキルです？黒乃さんの世界風に言うなら超能力ですね？」

「何か格好良いね！ねえ僕にも教えてよそれ！」

「えっとお…黒乃さんは人間なので無理だと思いますよお…？」

「おーい…そんな事より早くこ―から出してくれッス～！」

「駄目～？あたしの愛しい黒乃さんの命を奪おうとした罪はそう簡単に許さないんだからあ。」「

その後フィンディはカードを破こうとしたり、火で炙る等してレラジエを拷問した。

カードとは言え、ある意味残虐な彼女の行動にこの時ばかりは黒乃も本物の悪魔と思つただろう。

> . 1 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9752y/>

---

悪魔でもバスガイド

2011年12月1日20時58分発行